

法語

繡^{シテ}化城ヲ歸^ル寶處^ニ時 電光石火^モ不^レ皓^レ追^フ

神通用^ヒ盡^{スモ}迂回甚 事定^テ蓋^フ棺^ヲ堪^レ作^レ奇

恭惟

大圓寂。洞爺良晃和尚。假^ニ借^{シテ}四大^ヲ。以^テ爲^ス一^生。一^生。二^三。三^三。歡世線已畢^ル。死也不^レ赴^カ泉下^ニ。生也不^レ假^ニ胞胎^ヲ。

處々遊戯三味^{ナリ}。即今眼光落地ノ時還到^ニ。這箇ノ境界^ニ。露。

試向^テ二^一。通^{スレバ}。一^一。氣^一。擔香煙淡^ヲ散^ス清風^ニ。

通夜弔歌

焚く香の煙の中に面影を仰ぐはいとど悲しかりけり

大松閑居八十三翁

新聞記事を送る

教區長 横須賀市曹源寺住職 橋本春晃

暴風被害相次ぐ中にも十五號颱風は本州を大過なく通過し青函に於て大きな被害を出した事は意外な出来事で誠にお氣ノ毒であつた。この中桑山さんの情報に惨事を身邊に痛感した。聽て變られた姿で歸還される事となり私も上野驛迄出迎へました。若い方であれば猶一層お氣ノ毒でありまた御遺族の心中深く痛みました。國鐵に關係がある事とは云へ上野驛ではこれが取扱ひの丁寧さと關係者と一般焼香者の多い事に驚いた。

さて今回のお迎へに當り心中思ひ當る事を述べさせて頂きます。これは亡き實弟の事で支那事變の際海軍部隊として上海上陸戦を初

め揚子江のソ江作戦の第一線に次々と上流地点の要所を占領し救々の武勳の状況を時々知らせて來ました。然し現地は必ずしも左に非ず、彼は父母に心配をかけまい一念からであつた。昭和十四年十月廿二日付で二枚の葉書が一度に舞込み、何時もの情況と合せて、この手紙の着く頃には望みの武漢三鎮は陥落して居る事と思ふ、ニュースで情報を御覽下さい萬歳を願ひます両親によろしくと強く走り書きしてあつた。その夕食時である電報があり戦死の通報であつた。やがて三十六日目に遺骨は名古屋驛に歸還した。こゝで出迎へた瞬間初めて彼の死を眞實として、抑へ切れぬ想ひであつた。追て本葬儀に慰靈祭等にその都度盛儀は新聞に詳しく速報された。親内に取つてはこの新聞こそ生涯幾萬枚中見る中の數紙であるとし所持して居ります。見る度に追憶新たに感じます。今度の記載新聞記事を桑山氏へ送つたのも、想ひ出の過程が類似して居る様に思つたのでお送りした譯である。

御葬儀參列寺院中で私より案内させて載きました方は曹洞宗第六教區十六ヶ寺と宗務所長、市内各宗佛教會十七ヶ寺で何れも參列され、特に東福寺徳壽院良長院では奥様共に御焼香がありました。

法友の死を悼む

熱海市泉保善院住職 平田哲藏

法友良晃和尚は桑山晃道師の長男に生れ禪僧の面目を修められた父と小學校訓導たりし母の薰陶を受けて成長したのである。従つて性格的には両親の長所を身につけ誓願堅固にして道念綿密なるものがあつた。然し縦横に祖師禪を振う機に恵まれず北海に散華した事は寔に残念且つ哀惜の情に堪えない。靜かに追憶し見るに和尚の短

かゝりし生涯は實に不遇であつた。駒大在學中に慈母を失なはれた。當時の悲嘆察するに余りあるものがあつた。母の葬儀圓了後「皆さん有難う」と頭をたれた淋しい面ざしは強く印象づけられて未だに消え去らない。然し彼の強い性格は父の慈悲に護られて其の哀愁を克服し伸びて行つた。駒大卒業時、禪宗史研究に没頭中二三の友人と小寺に種々の寺寶（古文書等）を調査に來られた。其の時は若き學研の徒として研究論文完成近き爲か明るい影が見られ私は秘かに父の理想通りに亡母の切なる祈りの如くに自己を切り開いて行く雄々しき姿に萬感の思いを懷いたのである。爾來學窓を無事巢立ち、可睡齋に參禪辨道の實を修め父晃道師も將來を樂しみ彼の話をすると相を崩して喜んで居られたのである。然る處今次の災禍は瞬時にして若き禪僧の大望と老父の夢を水泡に歸せしめたのである。人生最大の悲惨と云ふべきである。茲に、謹しみて哀悼の意を表しつつ筆をおく。

桑山君を憶ふ

遠州可睡齋僧堂副寺 佐 瀬 淳 光

高階禪師の會下で修行を積んだ桑山君があゝの洞爺丸の遭難の禍中にあつたとは、可睡齋僧堂の私達は晴天霹靂の想であつた。或る禪師の法語に回頭人生總維夢の一句があるが、誠に夢中の事の如しである。夢の如く來り夢幻の如く去つた桑山君であつたが、同釜の飯を喫した私達の心の中には、桑山君のあの樂天的な風姿が、染着いて離れない懐しい存在である。物欲に恬淡だつた桑山君、服装も意に介さず、對人關係に於いても心の凝を残さず、本當に禪僧らしい

風格を生れ乍らにして持つていた人物であつた。

友あり遠方より來るまた樂しからずやとばかりに、坊來の友と、なけなしの金袋を叩いては少しばかりの酒を買い求めて、暖い心を汲み合ふ桑山君の姿も、私達の懐しい故人の想ひ出の一つである。私は桑山君に期待する所が大であつた。それは故人が史學の專攻をしていたからである。世界は今や人類の指導原理を歴史學に求めんとしている。この秋にあたつて史觀を根底として佛教を眺め、そこから生きた指導理念を導き出しそれを青年僧の間に滲透してもらふには、桑山君をおいては他に適任なしと考へていたからである。あの夜のこと私はその期待を故人に語つた事があつた。彼も大いに共鳴して二人ともくその實現を樂しみにしていた。そうした君が可睡を去つたことは誠に残念であつた。その上今や幽明境を異にするに至つては無量の念が絶えない。然し君の弟である信晃君が可睡僧堂の首座として上山し修行している。私達は君だと想ひ、君の後継の信晃君と思つて、かつて君に捧げた私達道愛を更に倍加して、この信晃君に賜り護念している、本當に安心して戴きたい。これが私達雲水の君に捧げる焼香一片の回向である。

道友桑山良晃師の會靈に捧ぐ

静岡縣福田町觀音寺内 深 川 成 典

寒威凜烈として師走の風が萬松山頭に吹きすさび骨身に徹する早朝、敢然として溝に跣足を投じ黙々として竹箒のさばきも鮮かに溝浚いに精進して居られた後姿こそ曾つて道心そのものに生きられた桑山良晃師平是底の面影でありました。泥中に咲く蓮花の如く、苦難の中にも氣高くその香りは道友間に隈まなく薫習し、恭謙濃厚